

この三冊

藤沢, 毅
尾道市立大学

<https://doi.org/10.15017/7363926>

出版情報：雅俗. 22, pp.2-3, 2023-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：



この三冊



藤沢 毅

1、不朽の業績と思う研究書一冊

横山邦治著『読本の研究——江戸と上方と——』（一九七四年、風間書房）。

横山先生が読本を研究対象とするようになったきっかけは、『読本研究新集』第6集所収の巻頭言「読本研究」再発刊の報を聞いて「なごに書かれているが、広島大学の真下三郎研究室に大量に積み重ねてあった読本の整理を始めたことである。「あの長編の本を片っぱしから読むことを始めた。読み始めると結構面白いので、修士論文も博士論文も、読本の研究という事になった」「中村幸彦先生のご蔵書も、淡路島のお宅に通って読み耽り、何時の間にか読本の研究者と言ったことになった様である」とある。こうして読本というジャンルに対して初めて網羅的な研究を行った成果がこの書となる。

まず序章で読本の名称、体裁、分類を論じ、

「実態に即した」総括的把握をなす。これをもとに第一章から第三章にかけて、「展開期」「全盛期」「終結期」の読本を、序章で検討した分類を用いながら論じていく。『英草紙』や『雨月物語』、あるいは京伝作や馬琴作ではない、これまでほとんど見向きもされていなかった読本を、繰り返すが「網羅的」に読み、内容を整理し、それぞれの特徴を見出し、それらを結び付けて大きな流れを概観できるようにまとめているのである。

読本の所在は『国書総目録』を見るか、または各図書館がそれぞれ発行している蔵書目録で探すしかなかった時代である。学会で地方に行くと、必ずその地の図書館を訪ね、読本はないか聞いて、あれば閲覧していたそうである。そうしてまとめ上げられたこの書は、論文集ではなく、まちがいなく一冊単位の大論文なのである。もちろん、遺漏はある。初印本に出会えな

かったものもあれば、修訂があることに気づかなかったものもある。何より、結局、著名でなかった読本の魅力は語り切れていないというものが多い。しかし、この書があるからこそ、現在の読本研究が生まれている。現在、私は科研のチームで、「文政期読本」「享和・文化初期読本」「最盛期読本（文化五〜七年刊）」らを網羅的に扱うという方法で取り組んでいるが、だからこそ、この書の偉大さがよくわかるのである。

2、自分と最も縁の深い古典一冊

『近世説美少年録』きんせいせつびしょうねんろく（曲亭馬琴作、歌川国貞・魚屋北溪画）。第一輯文政一二年（一八二九）刊、第二輯同一三年刊、第三輯天保三年（一八三二）刊。続編に『新局玉石童子訓』がある。大学三年生の時、卒論は『南総里見八犬伝』

か、『うどん／そば』化物大江山』のような黄表紙かと考えていた私が、図書館で有朋堂文庫の『近世説美少年録』（『新局玉石童子訓』を含む）を偶然手にとり、冬休みに読んだ。卒論での研究対象と決め、資料を集め、また考察した。面白すぎて、四年の六月になってから大学院進学を志すこととなった。内々定を貰っていた企業には辞退の連絡をした。要するに私が研究者になったのは、『近世説美少年録』と出会ったからという他にない。

淫奔にして狡知、けれども反省もする悪人として描かれた美少年・陶朱之助晴賢は、私にとっては馬琴作のどの読本に登場する人物よりも魅力的であった。また、「発端」に、迫力ある挿絵とともに描かれた、空中に蛇と鳥が戦う怪異。これが何を意味するのかは、この作品が未完であるため謎として残されている。馬琴作の他の作品、日記、書簡を読み、最後は役行者や孔雀明王まで引っぱり出して謎解きを試みた卒業論文。大学院修士課程では、学んだ書誌学をもとに、北は弘前市立図書館や八戸市立図書館、西は九州大学など、当時所在のわかつていた全国の『近世説美少年録』の諸本調査を行ったのも懐かしい。

3、大学院生に奨めたい入門書一冊

土田知則、青柳悦子、伊藤直哉著『現代文学理論 テキスト・読み・世界』（一九九六年、新曜社）。

以前勤めていた大学に着任して初めての学会発表を行った時、曲亭馬琴作の合巻『月都大内鏡』における御家騒動の趣向を論じたことがあった。加賀騒動を読本『絵本雪鏡談』から、また天下茶屋を浄瑠璃丸本『讐報春住吉』から取り、読者にその御家騒動の場面をイメージさせながら読ませるように作られているというものであったのだが、これに対して、近代文学を専門とする先輩教員から、「近世の研究者はまだ典拠論などという研究方法をとっているのか」とのコメントをいただいた。当初は戸惑うのみであったが、確かに私は文学理論を勉強していなかったのだ、そこから約三年かけて文学理論の本を読みまくった。結果として、やはり典拠を考察することは意義のある研究方法だと考えるにいたっている。ただし、「作者の意図の追究」という初期のテキスト論によって否定されたものに結論づけるのとは違い、典拠を踏まえて読むことによってどう変わるか、どのよ

うな新しさが見いだせるかということに重点を置く。結局、それが当時の読者にとってどう読めるか、そしてそれが作品（この語を否定する向きもあるが、私はその考えをとらない）の評価をする上で必要なものと考えた。また、文学研究における書誌学の必要性をより強く意識するようになった。

文学理論はある程度学ぶべきである。その上で、自分が正しいと思う研究方法を見出すべきであろう。自分の専門としている狭い領域で用いられている研究方法のみしか知らない、あるいは先人の方法を盲目的に真似をしているのは、学問が痩せ細る。もちろん、安易に流行を採り入れるべきでもない。

この書は、一九九六年当時の基本的な文学理論が説明され、そしてさらに考えを深めるべく、参考文献が多々示されているところが良い。その理論の元から辿ろうと思えば辿れるようになっていくのだ。理論書ということでは、他にも個人的には勉強になったものがあるのだが、まずは入門書としてこの書を奨めておく。